

ステファニー・レナト賞の彼方に

田中英夫

賃貸マンション3LDKの私の翻訳事務所に黒い肌の男が住みついたのは私が四〇代後半にあったときだった。

Mという典型的な回教徒の名前であり、仕事を求めてわが国にきていた。当時のわが国はバブル経済最盛期にあり、海外からの出稼ぎ労働者をときどき目にするようになり、不法残留・就労者が社会問題化しかかっていた。アジア情勢や出稼ぎアジア人就労者に詳しい人から、一度彼らに親切にすると、もっと良い仕事を探してくれとか、女性を紹介してくれといった要求を次から次に出してきて、その要求を叶えてやらないと恨みを抱き、叶えてやっても最後は恩を仇で返すから親切にするのは考えものだという忠告をうけた。そうした話は他からも聞かされていたし、次から次に要求してくるというのは事実だった。しかし恩を仇で返すというのは、外国語能力の欠如から意志の疎通がはかれなことからではないかと気にかけることはなかった。

また別の人から、開発途上国を訪れ、あるいは滞在して全てを知ったかのごとく「この国の人たちは純朴であり、人をだます悪人や泥坊はいない」と語る人がいるが、いかなる土地であれ、生活を営んでいる大多数の者が善人でなければコミュニティは維持できない、しかしながら家に鍵がないのは善人ばかりだからではなく、盗みの対象となる財を一般の人々は持たず、金持ちは自衛していて盗みを試みるのは危険という現実があり、「良くない者たち」はより安全に犯罪で成功できる先進国の都会に出稼ぎにくるのだという話を聞かされた。そして貧しさから抜け出せない郷土人を軽蔑していたMからすらも後に、「人々が国内にとどまり善人ているのは、勇気がなく、知恵がないからだ」と聞かされたことすらあった。

なぜ彼を居候させたかといえ、住むところもなければ仕事もないと困っていたからだが、もともと外国人が好きであり、Mはインド人英語の傾向にあったが、優れた英語が話せ、読み書きもできるようだったからだ。

翻訳の仕事は文字通り盆も正月もなく、納期は厳しく、毎日一三、四時間ぶっ通しで働いても毎週一度は徹夜となり、翻訳の仕事があつても断らねばならず、外国人と付き合う暇もなく、たまに外国人から英語で電話があると嘆かわしいガタガタ発音になってしまっていた。

あるときスーパーマーケットのガラス・ドアの前で中年の外国人女性が不安な顔つきで苛立ち、行ったり来りしていた。女優のように美しいブルーネット。その年齢の女性の美しさをロシア語は「小春日和」というが、まさにそうした美しさである。ほとんど無意識に「どうかされたのですか、困りごとでも？」と話しかけていた。ところがそのなんでもない英語がからきし通じない！

このようなときは「トアボー (Trouble) ・マダム？」だけでも勘の良い相手なら通じるはずだ——トラブルでは絶対に通じないが。女性は眉間に皺をつくり「なんです？」と警戒の表情で英語でたずねてきたから英語が話せないわけではない。パニックに陥り、言い回しを変え、三度ほど繰り返してやっと通じた。

「オー！」ぱっと花が咲いたように明るい笑顔になり、「いえ、子供たちが買ひものするのを待っているんです、ご心配にはおよびません。いずれにしてもほんとうにありがとうございます！」とドリスデーの緑色の瞳を輝かせ、晴れやかに答えてくれた。しかし私の表情は暗く凋んだはずだ。そうしたときは、差し障りのない短い会話をかわし、「良い週末を！」などと言って別れるべきだが、逃げるようにその場を後にした。外国では翻訳と通訳の違いはない。

——恥をかかせやがって！ お経の読めないアルバイト坊主ではないか。
私は自分を叱り付けた。

また、それまで知り合ってきた外国人は、英米人のほかはロシア人（英語より露語・仏語が得意だった）ドイツ人、フランス人、スウェーデン人など欧米人ばかりであり、アジアの人たちと話しあう機会を持ちたかった。かつて工業薬品の技術者をしていて、韓国やタイなどからの研修生と仕事をしたが、仕事にかかわること以外まるで話したことがなかった。その点Mは、積極的に日本の

社会に溶け込もうとしているようで好感がもてた。

当時、わが国は難民を受け入れないと世界の非難を浴びていた。難民を受け入れないどころか、日本に長く住み、日本人になりきった人間ですら国籍を取得するのは絶望的であり、一人でも多くの外国人を追い出そうという攘夷思想にあった。様々な製品を世界中に売り、稼ぎまくって豊かになりながら、観光やビジネスなどの訪日は別として、外国人に住みついてもらっては困る、働いてもらっては困るという。その理由は、犯罪が増えて安全神話が失われると。確かに、犯罪が増え、公共器物がこわされたり、子供を外で遊ばせることができなくなるといったことは、ドイツ人やフランス人にたずねれば間違いないことがわかる。わが国においても、浅黒い肌の外国人がふらふら運転のボロ車を駐車してあった二台の車に突き当て、そのまま逃げ去るのを目撃したことがある。

しかしながら、これからも輸出に頼らねばならないわが国は、国際道義上からも、外からの埃をかぶることは避けられないのではないか、ある程度の難民は受け入れ、家族を養うため職を求めて来る人たちを迎え入れてやり、野放しにするのではなく、公共の宿泊施設に収容して管理・監督できるようにし（やりすぎると人権問題だが）、稼げるようにしてやった方がわが国のためではないかと私は考えていた。つまり、出稼ぎに来る外国人を犯罪人扱いにし、追い出そうとする入国管理事務所のやり方に批判的だった。もともと、入国管理事務所の役人にしても、国の政策と国民の要望を誠実に実施しているのであり、彼らが悪いのではないし、父は役人だったのだが……。いずれにしても、かつて反政府活動などしたことはなかったが、このことに関しては反役人無政府主義者となり、政府にかわり海外出稼ぎ就労者を支援してやろうということになっていた。

Mは育ちは悪くなさそうであり、大学を出ていることは間違いないようだった。にこにここと気味悪いほど愛想が良く、笑うときは思いきり笑い、卑屈といえるほどのリップサービスであり、第一印象に暗い影は見られなかった。

ただ、三〇歳ということだったから、子供が二、三人いるはずであり、大学を卒業し、それだけ優れた英語が使えるなら公務員になるか、あるいは外資系の会社などに就職しているはずであり、外国をうろついているのは不可解だっ

た。年より若く見え、ウエスト・ポーチをし、本人は垢抜けた都会人と思っ
ていたようだったが、イマイチだった。しかし西アジアからの出稼ぎ人にと
して見うけられる不潔感はなかった。西アジアとはミャンマーから西のイス
ラム文化圏のことである。

本人の言葉では、女性に持てて仕方ないとのことだったが、厚い凸レンズの
メガネをかけて目は常に驚きに見開き、笑うと白い歯が下品に輝き、よろこ
んで相手する女性がいると想像するのは難しかった。自分はアフガン人だとい
私に見せたパスポートは、あとひとつのスタンプを押すスペースもないほ
様々な国のスタンプで埋めつくされ、胡散臭いものがあった。

アフガンには明らかなコーケーシアン（白人種）、インド人のごときニーグ
ロイド（黒人種）、そして日本人に似たモンゴロイドもいるというが、私の知
る限り、都会生活者ですら沙漠の乾燥と砂埃つぼさが、あるいは廃墟となつた
オアシス都市の焦熱と疲弊が、あるいはまた遊牧民の剽悍さと皮膚の厚さがあ
る。ところが彼はそのいずれにもあてはまらなかった。当時、ソ連軍はアフガ
ニスタンで争いにあった。彼の話によれば、アフガニスタンでゲリラとしてソ
連軍と戦っていたが、ソ連軍の毒ガスにやられ、このようなメガネを必要とす
るようになったという。背は私と同じぐらいで日本人としても低い方であり、
力はあるようだったが、ゲリラの面影などまるでない。彼を早朝ジョギングに
誘ったことがある。そのとき驚いたことに、足を引きずり幼児のようで、三分
と走ることができず、喧嘩すらできそうになかった。

しかしながら、ソ連軍が毒ガスをつかったというのはいりうることであり、
おおいに興味をそそられた。

そこでそのガスは黄色ではなかったかとひっかけてみると、そうだと答える。
黄色のガスとなれば、太平洋戦争のときアメリカ軍が硫黄島で使った皮膚から
も吸収されるといふ猛毒の黄燐弾か、塩素系の毒ガスだが、そのような致死化
学兵器を使うはずがない。

「ありえない」私が言うのと、「嘘ではない。信じてください、ブラザー！」を
繰り返す。彼はやたら「ブラザー」を口にしたが、気色悪さには耐えられない。

私の父は戦時中に郵便隊を志願してビルマにあったが、現地に黒い肌の子供を
残してきたとは聞いていなかった。

相手が嘘をついているとなれば、私は意地悪を發揮したくなる。

「どんな自動小銃を使ったか？」私は尋問する。

「いろいろです」

「そのうちのひとつでよい」

「いろいろ」

「どこの国の銃か？」

「いろいろ」

「ぞれでは、カラシスキーR16を使ったことは？」

「無論あります」

「いい銃だったか？」

「いい銃だった」

「なるほど。しかし今言い間違えた。そんな自動小銃は存在しない」

彼は嘘がばれたと悪びれることはなく、納得したようにここにこしている。

何人のソ連兵を殺したかとたずねると二〇〇人だといい、ソ連軍の数台の戦車が渡っている橋を爆破したとか、ソ連軍に追われて河にとび込み、ストロウで息をしながら二時間水の中に潜んでいたと、子供でも笑い出してしまう荒唐無稽なことをいう。その上、非常に臆病な人間であることはたちまち明らかになった。

「手榴弾をつかったと思うが、どうやって投げた？」と私。

一般の人たちは野球のボールを投げるようにすると考えているから質問したのだ。すると右手を耳元に持っていき、「ピッ！」と煙草の吸殻を池に捨てるようなしぐさである。

あまりにもふざけた話であり、「人を馬鹿にする気か！」と怒鳴りつけたい思いだ。一般の人々なら、口を聞くのも嫌になり、助けてやらねばならない理由はなにひとつなく、直ちに追い立てたであろう。しかしながら、そうした馬鹿馬鹿しい話を彼が育った国の人々は信じるということであり、アジアの事情にうとい私は、逆に民族的な興味を持たされた。

彼の家は日本大使館の近くにあり、その家はソ連軍の空爆で三分の一が破壊され、妹と父親が爆死し、二人の兄はソ連軍により人々の眼前で処刑されたと、悲しみの表情で劇的に家庭の悲劇を語ったが、寒気のある大根役者である。

モスクワ大学にはルムンバ大学、あるいはエスニック学校などと称される留学生を無試験で受け入れる学校が付属している。ケネディー大統領殺害容疑者オズワルド、世界一危険な男といわれたテロリストのカルロス、それに多数のドイツ赤軍テロリストたちが席をおいていたことがあり、スパイ・テロリスト養成学校ともいわれていた。モスクワに行つたとき、一年ほど学んでみようかとその学校を調べてみた。当時はメキシコで反政府活動をしていた医学生が多数流れてきていて、メキシコの留学生と知り合い、生徒たちはテロ行為で英雄気どりの連中ばかりで勉強する雰囲気のないことを知らされたし、二〇代ではテロリストになるには年がいきすぎていた。そのときソ連の戦略兵器などを写したプロパガンダ・フィルムを何度も見させられ、ソ連軍の戦術にくわしくなっていた。

ソ連軍は空爆などせず、重要拠点に兵士のみならず戦車もパラシュートとロケットの逆噴射でソフトランディングさせ、街ならば建造物を破壊させることなく一気に占領してしまう——事実、アフガニスタンではそのやり方だった。そうした知識があることを自慢したくもあり、そのことを知らせたが、「ソ連の空爆で家の三分の一を破壊されたのです、ブラザー」を繰り返した。

クルト人やネパールのグルカ人など国家を持たない民族に当時の私は興味をもっていた。Mの話では、彼らは勇猛果敢で優れたところもあるが、ひとつはあることを主張すると、それが誤りだといくら指摘され、証拠を見せられても決して誤まりと認めようとしないう。つまり異様に誇高く、協調性に欠け、国として纏まらないのだ。彼自身もまさにその通りであり、西アジアの人々に共通したことのようだった。

イスタンブールの大学に通っていて、アフガン戦争が始まったので、ソ連軍に報復のため国に帰ったとも語った。

「自分はイスタンブールにいたことがあり、トルコ語も少しはできる（実は、半日滞在しただけで、ハツタリである）。『ブン・ギョズムシンン！』とはどういう意味か？」私はたずねた。すると彼は頭を下げ、目を落として何も言わない。

「イスタンブールの大学に通っていたというなら、回教世界では最高のエリートのはずだ……。ギョズは名詞なら『目』、動詞なら『見る』であり、その

トルコ語は「これを見せてください！」という意味だ」

「あり、それは違います、ブラザク。ブルン・ギヨシム、シシムンシ（この通りではない）“です”と得意そうにいう。おもわず彼の臨機応変さに笑いだしてしまった。すると彼も何のこだわりもなく私と一緒に笑った。彼には荒唐無稽さを押し通してしまふ奇妙な才能があったのかもしれないなかった。

それにしても普通の人間なら、作り話をするにしても、下調べをし、「ありうる話」にもっていくはずだ。ところがMはたしかにアフガンにいたようであり、様々な土地の事情に通じていたが、兵器のみならず、アフガンの歴史や回教にまるで知識がない。今日、兵器に興味のない人でも、海外ニュースに目を通すことがあれば、修理を要せず子供でも扱え、それゆえアフリカで少年兵が増えていると言われるロシアのカラシニコフ自動小銃ぐらいは知っているはずだ。要するに、嘘は嘘と認めたときに嘘になるのであり、絶対に嘘ではないと嘘を通せば真実であり続けると信じていたようだった。となると、知識や教養など意味をもたないのである。

しかしMの破天荒な話には私に寛大だった。やはりアジア人同志という根拠のない近心感があり、まさかここまで馬鹿げた嘘をつくはずがない、相手を楽しませようとするユーモアではないかと善意に解釈し、騙されておいてやれと鷹揚にかまえたのである。ところが後になり知ったことだが、自分は頭が良いから見事に騙せたと彼はおおいに得意だったのである。日本人は知能が低いとMは口を滑らすことがあったが、日本人は容易に騙せると確信させる結果となつてしまった。

今考えると恥かしいかぎりだが、稼ぐためのみに働くのでなく、日本人の生き方や文化を学び、国に帰ったら学んだことを生かして人々につくしたい、あるいはまた、事業でも起こしたいというなら匿うことを考えないこともないと告げたのである。そう言われれば、「人々に貢献などと笑わせることを！」と内心思っている、これは取りこめるとほくそ笑み、「ええそうです、そのつもりでこの国に来たのです、ブラザク！」と答えるのはあたりまえだった。

当時は、彼らのいうオーヴァー・ステイ（不法滞在）で働いている外国人を厳しく取締る法律はまだなかった。彼の国で労働者が一月働いて得る収入は——仕事があればの話だが——わが国で八時間の日当にも及ばなかった（一九一

○年の月間最低賃金が二千元)。私に匿われていれば、家賃、光熱費、電話、英字新聞の支払いも必要ないのだから、一年間堅実に働き、貯蓄にはげめば、国に帰って少なくとも一〇年は働かなくとも家族を養っていける。彼も語っていたが、仕事さえあれば犯罪に走らないのである。そして資金さえあれば、事業を始めそうな男に思えたのである。

匿ってもらえると知ると、彼は感謝の言葉を繰り返したが、感謝の気持ちがまるで伝わってこない。後に円高・ドル安となり北米人が英語を教えにわが国に殺到したとき、主にカナダ人を居候させたが(二人のときもあった)、感謝の言葉など聞かされなくとも、感謝していることは常に感じられた。彼らと生活を共にして知ったことは、欧米人とは語らなくとも分かりあえる安らぎがあったが、アジアの人々、特に回教徒の民は日本人とはまるで異質だったということだった。

例えば、「アッラーにあなたのことをお祈りします」と繰り返し語り、私をこの上なく不快にさせた。私は仏教について何も知らないが回教徒であり、他の神に祈ってもらうのは屈辱である。第一、彼は回教とユダヤ教との関係について何もしらず、アラビア文字にすら知識がなく、アラビア語で唱えねばならない祈りの言葉を暗記しているとは思えなかった。事実、二日目の朝事務所に入ると、彼の部屋のふすまは途中まで開けてあり、彼が祈っているところが見えるようになっていたが、いかなる祈りの言葉も聞けなかった。もともとMの祈りは一週間と続かないであろうと予想したが、二日で終りだった。

最初の夜に一二時を過ぎて仕事が仕上ったため、ほとんど毎夜そうしているように、M電機の二四時間開いている正門受付に仕事を届け、新しい仕事を受け取るため、彼を助手席に乗せM電機に向った。すると車が発進するや否や「あなたは奥さんがいるからいいが、自分には女がない。だから女を紹介しろ」と命令するとき口調で繰り返し要求してきた。

「さっそくおこしなすった！」

予想してたことだが、その日に要求してくるとはやはり驚きであり、おおきな落胆だった。欧米人や日本人には「恥」という共通の倫理規範があるが、彼らにしてみれば、「求めねば損」あるいは「駄目でもともと」である。もっとも彼らにとってそれは慣わしであり、腹を立てるべきことではなかっただろう。

自分があなたの立場なら、いくらでも女を紹介するとも語ったが、彼の国で私とその国の女性と一緒に歩いたとしたら、どういうことになるか？ 石を投げられるぐらいで済んだら幸いである。

「コーランに興味があるが、コーランの言葉をひとつ聞かせてもらいたい、ひとつで良い」私が言うと、彼は黙ってしまった。破廉恥な要求をしてきたとき、宗教の話題を持ちだすと、黙らせるのにすぐれた効果を發揮した。

最初のうちは朝事務所に入ると、Mは既に起きていて私を迎えたが、三、四日もすると、夜遅くまで遊びに出かけるようになり、私が事務所についたとき、Mは私の仕事部屋と唐紙で仕切られた六帖の和室で眠りにあった。

ところが私が仕事を始めると、彼は悪夢にうなされ出した。それもちよつとやそつとのうなされ方ではない。キーキーと動物的な声をあげ、ドタンバタンと陸に釣り上げられた魚のように跳ねまわり、本箱や壁に頭や足をゴツン、ゴツンとうちつける鈍い音がする。それでも目を覚まさず、殺されかけた動物が命乞いするように喚き続ける。無論、仕事などできるはずがなく、気味悪くなり、私は喫茶店に避難した。

三日ほどそれが続いたところで目覚めさせてやり、決して言いのがれさせないという迫力で人を殺してきたであろうと問いつめると、そうだという。学生運動のときだと語ったが、そのような理想とは程遠い人間であり、殺したのは最近のことに違いなかった。彼の国では、「見知らぬ者に財布を見せても、友には見せるな」というと語ったが、人殺しするなら、親しくなり後ろから襲うやり方だろうと思えたが、それは正しいことが後に明らかになった。先の忠告者によれば、わが国では常習犯罪者はそれらしい顔つきをしているが、中国や開発途上国では必ずしもそうではないとのことだった。後に、この男は常習殺人犯ではないかと思ひ知らされたのである。

しかし人殺しを告白してからは、うなされることはなくなった。そして二日目からすでに近所の店などに行き、女店員に付きあつて欲しいと出鱈目な日本語にジェスチャーをまじえてしつこく迫っているようだった。欧米だったら、店主に蹴り出されていただろう。

とはいえ不快なことばかりでもなかった。

あるとき、二人の中年会社員が翻訳の仕事を携えて事務所を訪れてきた。私

は彼らが来たらお茶を出してほしいとMに伝えておいた。やがて二人の客が応接室の椅子に落ちついたところで、黒い肌の男がお茶をもって現われ、いまだ外国人は珍しいときだったから、二人はあつけにとられて言葉もなかった。子供っぽい話だが、信長になったようでおかしくて仕方なかった。しかしそれ以後は命じなかったので、客がきても気を利かすことはなかった。

一週間ほどして、入国管理事務所から不法滞在外国人を匿っていないかという問いあわせの電話があった。Mが女性を求めてマンションの前のバス通りをうろついているのを仕事部屋から窓越しにしばしば目にしたが、近所の人が気味悪がり、居場所を突きとめて通報したのだろう。電話してきた係官の口調が不快であり、「知らない」とぶつぶつきら棒に答えて電話をきった。

更に一週間ほどしたある日、母が一人住んでいる実家にMを連れていったことがある。そのとき近くに一人住んでいる姉が彼を目にした。そしてしばらくすると、姉から彼のことを新聞に出ていると電話があり、新聞の切り抜きが郵送されてきた。増えだす傾向の見え始めた不法滞在外国人労働者の犯罪にかかわるシリーズ記事であり、厄介な不法滞在外国人の例としてMが載せられていた。彼の特殊な眼鏡からしてMを知る者なら、その記事を読めば直ちに彼とわかるはずだった。

記述によると、名古屋駅で夜を明かそうとしていたのを保護され、アフガニスタン語以外は話せぬといい、アフガニスタンの留学生が呼ばれて通訳したところ、アフガニスタン語をまったく話せなかったという。入国管理事務所滞り期間が切れていると論じたところ、「ゲリラだったから、送還されればソ連軍に処刑される、送還するならここで殺せ！」と座りこんで手におえなかったが、管理官の手を逃れ—————————————————————————この街に消えてしまった、いったいどこに消えてしまったのかと、ミステリー調の記事となっていた。無論、その記事を英語にして彼に聞かせた。彼は目を落とし、陰鬱な表情で黙って耳を傾け、私が読み終え、「何かいうことは？」とたずたが、何も答えなかった。

ゲリラというのは作り話だったが、国に帰れば殺されるというのは事実でないかと思えた。開発途上国から日本へ出稼ぎに来る人たちは、彼らにとっては巨額の借金をして来ることが多かった。従って稼ぐことができず、金を持たずに

帰ると殺されるということはありえた。

また、新聞記事に記述はなかったが、ならばなぜパスポートを持っていたかと思う人がいるかもしれない。入国管理事務所もそのことをMにたずねなかったようだが、偽名であっても偽造や盗難パスポートではなかった。アメリカなどもその入手方法に気付いているはずだが、厄介な国際問題になるので公にしないのである。

正直なところ、二週間もするとすでに彼との会話にうんざりするようになり、優れた英語を使おうという気になれなくなってしまった。例えば当時は誰もそのようなことを言わなかったが、「アフガニスタンからソ連軍が引上げると内戦になるにちがいない、すると現在より市民は悲惨な状態になる」と私が言えば、Mは回教徒同志だから内戦は決して起きないと一本調子の断定を繰り返すだけである。民族観、歴史観や宗教観といったことに観念的思考を働かせないし、文芸作品をまるで読んでいないから語彙が乏しく、会話が続かない。教養ある欧米人であれば、「なるほどそれは考えられないことはない」ととりあえず相手の意見を認め、「となるとアメリカはどう出るだろう？」と質問を返すから話が展開していく。反対意見があるなら、その後に出しても遅くない。要するに私は彼を見そこなっていたのである。

入国管理事務所では犯罪に走ると見て捜しているようだったが、「人を売る」、つまり入国管理事務所に引き渡すといったことは、私には絶対にできないことだった。そして追い出せば自暴自棄になり犯罪に走るだろう、居候させて仕事を見付けてやり、金をためれば犯罪に走らず帰国するだろうと結論したのである。それに彼が鬱陶しくなったとしても、「外からの埃りに耐えねばならない」という意見の持ち主なら、自ら埃をかぶり範を示さねばならない。「い年をして、それほどあえて自分に厳しくしなくとも、女房・子供が十分人生厳しいものにしてくれるではないか！」という人がいるかもしれない。まったくその通りなのだが……。

しかしながら、「追い出すか、いつかせるか？」雨に濡れていた子猫を拾ってきたときのように私の心は揺れ続けた。猫なら可愛いし、飼い主に迷惑をかけないから結論は直ちに出るが、三〇歳になった男であり、性犯罪をしないと限らない。レイプしたとなれば、私自身が自責の念に苦しまねばならない

のみならず、こちらが訴えられるかも知れない。この街（名古屋）の市民はゼノフォビア（外人嫌い）であり、先にも述べたように、ろくな結果にならないから追い出した方がよいのではないかと忠告を受けた。ところがそう言われると、よけい匿ってやろうという気になってしまいう性格を私はしていた。

居候を始めて一〇日ほどしたころ、私はダイニングルームのテーブルの上に、千円さつ五枚をはさんだ英字新聞を何気なく置いておいた。金をとってくれたなら幸いだ。良心の呵責なく、追い出すことができた。やがて彼は新聞を見ていてその金に気付き、私のところに「忘れてありました」と持ってきた。彼を試したことに自責の念がり、その五千円を彼に与えた。その五千円を彼は故郷に送金すると言い、どこの国の誰に送るか知りたく、郵便局まで私はついていつてやったが、やはり家族があり、家族に送金したようだった。

しかしそれは大きな過ちだった。後に知らされたことであるが、親切にされると、相手は自分を必要にしているとみなし、尊大な態度にでることがあった。当時五千円というのは、彼の国では労働者の二月分の給料である。それからしばらくして知ったのだが、私の事務所に来る前に、事務所近くの居酒屋で働き、売春もしていた東南アジア人とアメリカ人との混血女性を一万六千円で買っていた！——泊めてもらったら金を盗まれたとのことだったが。その種の女性が住宅街のバス通りの居酒屋に近所のことを近所の誰も知らなかっただろう。

それからしばらくして、Mは散髪して戻ってきた。当時若い人たちの間で、男でも美容院で髪をカットしてもらうのが流行っていた。どこの理髪店に行っただのかとたずねると、垢抜けした若い女性たちが働いている近所の美容院へ行き六千円払ったという。私は千七百円の安い理髪店しか行ったことがなかった。美容院は高いということは知ってたかとたずねると、「もちろん！」と得意な面持ちだった。 टीーシャツにしても、私は三枚千円の特価品だったが、彼は高級品だった。彼は父親が三件のレストランを経営していたと語ったが、実際に金持ちの息子だったかもしれない。しかしそれにしてもなぜそれほど金をもっていたのか？ 駅で夜を明かしたりしていたのである。

いずれにしても私の五千円の寄進は、かつてのわが国の開発途上国経済援助のようなものだった。経済援助として塩化ビニールプラントや缶詰工場などを沙漠に建造しても、生産にいたることなく朽ち落ちていき、喜ぶ者など商社と

翻訳請負人以外に誰もいなかったのである。

居候を始めて間のないとき、妻と長女と長男を連れ、Mとファミリーレストランに食事に行った。子供たちに英語を教えたことはなかったが、外国人に畏怖したり偏見をもたないよう、機会をみつけて子供たちが外国人と食事するよううにしていた。

ところがそのとき小学校五年か六年生だった長男は、にこにこ愛想良く笑いを絶やさないMを一目見るなり猛烈に嫌い、一緒に食事をしたくない、家に帰りたいと抗議のつもりか食べ物を口にするこすらなかつた。子供が初対面の大人に感情を露わにするとすわが国では珍しいことだから、子供に正しく躰をしなかつたと深く反省させられた。もつとも、カナダ人などとも一緒に食事をしたが、大人しくしていたことを思うと、外国人が嫌いということではなかつたようである。

* * *

Mは仕事を見つけてくれと繰り返し要求し、むろん捜してやらねばならなかつたが、日本語ができない肌の黒い人間を雇おうとする経営者はなかなか見つからなかつたし、彼の仕事さがしのために何時間も費やすわけにかなかつた私の事務所から近いところではなければならぬから難しかつた。それに食事のでるレストランのようなところが望ましかつた。

彼に言わせれば、言葉など問題ではない、二月も働けばぺらぺらになると語つた。それは間違いないだろうと思えた。私は英語を国語とする国にいつたことがなければ、英会話を習つたこともなく、学校では英語が嫌いだったが、いつのまにか話せるようになっていた。外国語の会話は、学問的なことと考えず、文法で話そうとしなければ——これは日本人には逆に難しいが——たちまち習得できるといふのが私の持論であり、それを彼に証明させてみせたかつた。

やがて知りあいが経営している深夜営業喫茶店の店長にMを無理やり押しつけて職につかせることができた。人目につかないキッチンで料理したり、食器を洗う仕事である。その経営者は私より一回り以上若かつたが、経営感覚に優れ、喫茶店から始めてあつという間に四、五件のスナックやレストランを経

営するようになった。喫茶店は軽食レストランでもあり、朝四時まで開店していて、常に人手不足だったから喜ばれると思ったが逆であり、私が勝手に店の経営に干渉したと腹をたて、しばらくは口をきいてもらえなかった。

Mは「仕事もみつきましたので、日本人女性と結婚してあげ、日本の国籍をとります」とあたかも自分で職を見つけてきたように私に宣言した。そこで私は貫い手が見つかりそうもない娘を持った父親のように、「日本人女性と結婚していただけるとは、ありがとうございます」と答えておいたが、彼は文字通りに受取り、上機嫌だった。私はおかしくて仕方なかった。

しかし日本語に上達し仕事に慣れてくると、盛んに苦情をもちこむようになった。店にはバイトのウエイトレスも多数いたが、仕事中にすら片っ端から彼女たちを口説こうするため、男子従業員の中には蛇蝎のごとく嫌う者がいた。「いつも六時間以上食事をとらずに働かせられるが、自分は奴隷ではない」「くわえた煙草で洗いものをするなというが、灰を洗淨液に落すことは絶対にない」「自分は経営者に雇われたのであり、他の従業員に雇われているのではなく、従業員に命令されたくない」といった苦情を次から次に持ちだしてくる。カナダ人などは、居候していて台所などが汚れていると、こちらが何も言わなくても綺麗にしたが、Mは気をきかすことがなく、命じられたこと以外は何もしなかった。

殺してやると包丁を振り回しているから止めに来てほしいと従業員が訴えにきたこともあった。「それだけの勇氣はない。あの男が人を殺めようとするなら、親しくなり背後から狙うやり方だが、そんなことはこの国ではできないから心配はいらん」と私はとりあわなかった。

Mから愚痴を聞かされても、私自身が自分の問題を山ほど抱えており——外国語の会話は簡単だが、文をつくるのは底無しの難しさである——、彼のために時間を割くことはできなかった。それにこちらが忠告しても自分は間違っていないと涙ながらに訴え、こちらの忠告に納得することはなく、同じ愚痴をいやというほど繰り返す。また私は、人を使ったり、命令したり、叱ったり、諭したり、自分がされたくないことのできない性格にあった。したがって苦情を聞かされるたびに「がまんするんだ！」と取り合わなくなっていった。

私がない夜にMが女性を事務所に連れ込もうとしたのを目撃し——どこ

まで事実かわからなかったが女性は逃げだしたという——、セックスしか頭がない「黒人」を居候させるべきではないと腹を立てた人もいた。女性が寝室を見たいと言ったとMは言い訳したが、さすがにそのときは注意せずにいられなかった。そのように卑俗なことで三〇の男に注意しなければならぬのは、やり切れなかった。とはいえ今も述べたように自分のことで精一杯であり、他人のことでいつまでも腹を立てている暇はなかった。

私の事務所では市外電話をすることは稀にしかなかったし、長電話することもなかった。しかしあるときから急に電話料金が嵩んできた。そして朝事務所に行くとき、電話のあるところにビスケットのくずのようなものが落ちていたこともあった。

私の事務所に来る前、彼は名古屋の近郊にある小牧市のカソリック教会で世話になっていた。その教会のイタリア人神父ステファニー師は、寝る場所もない外国人不法滞在者を匿っていた。先にも記したように、仕事を毎夜客先に届けにいったが、私がいなくてときにステファニー師に電話し、苦情を訴えていたのである。電話料金からすると、相当長い時間ほとんど毎夜話していたようだった。

しかしやがて教会に電話することはなくなった。あるとき、神父はどうしているかとMにたずねると、「まともな寝具もなく床にごろ寝させられ、我々の悲惨を人々に見せて多額の支援金を集めておきながら、我々のために一銭も使ったことがないし、食事に招いてくれたこともない。自分のことしか考えない身勝手な詐欺師だ。ボロ車でいかにも貧しく見せているが、ベンツの新車を買えるほど金はあるんだ、嘘ではない！ その上、あんな酒癖も女癖も悪い人間など！」と吐き捨てるようである。私は興味を持ち、彼にもっと語らせようとした。

七時頃からワインを飲み始め、酔うと人にどなりつけ、寝る時間になると信者の女性をベッドにつれこむ、それも毎夜違う女だと憎々しげに語った。私はおかしくて仕方なかったが、笑いごとではなかった。いずれの日にか私の事務所を出ていけば私の悪口を言うに違いなかった。それは後に事実となった。

強制送還される時、本人の航空運賃と大きな貨物運賃の支払いをMは求められ、働いて得た金は翻訳事務所の人間に全て巻き上げられて一銭もないと語

ったようであり、入国管理事務所の役人はその言葉を信じ——善意だけで匿う人間などいないと思ったのだろう——、送還費用を私に請求してきた。係官は罪人を相手にするような口ぶりだったが、当時は私を有罪にすることはできなかった。彼の荷物を押収すればことはすんだはずだが、そうはしなかったようである。

ステファニー師の話だったが、あまりにもしつこく苦情を聞かされ、さすがの神父さんも激怒したのだろうと推測できた。そしてそれからしばらくして、ステファニー師が私の事務所を訪れてきた。

師はこの地方で有名だった。師を有名にしたのは、外国人に対する指紋押捺問題にあった。師に言わせれば指紋押捺は、人を犯罪人扱いとする人権問題といたのであり、新聞によれば、日本人支援者を従えて入国管理事務所に乗りこみ、無期限座り込み、あるいは実力行使も辞さないほどの迫力で指紋押捺の廃止を訴えた。師の活動理念は外国人差別撤廃、社会的弱者救済にあった。

“殴り込み”は一度ですまず、二度、三度と新聞記事となった。最近はそのほどではないが、この地では公務員の特権階級意識が強く、権威にたてつくのは悪という認識にある。だが新聞記事はイタリア神父に好意的、というよりは気のきいた海外喜劇映画の一場面の扱いであり、市民は「やれやれ、もつとやれ！」と喜んでいるようなところがあった。多くの人たちは、指紋押捺など関係ないことだったが、「お上にはさからえない！」という市民の諦めを外国人が打ち破ろうとしたのが愉快だったのではなからうか。そして指紋押捺問題の次に来たのが「不法就労外国人救済キャンペーン」だった。私の場合には非難されることがあっても誉められることはなかったが、ステファニー師は多数の支援者を従えることができた。なによりも師の活躍には実力行使の華やかさがあつた。ほとんどの人たちは人道的立場から師の活動を理解したようだが、私は“対役人闘争”と解した。

そのようなステファニー師の訪問を受けたのは光栄であり、Mが私にしてくれたことで唯一喜ばしいことだった。師は、西欧人としては背は高い方ではなく、百七〇センチほどだったと思う。髪は白いものが混じり始めた濃い栗毛、額の前でウェーブさせた前髪をきつちりと片側に寄せた“レーガン・スタイル”であり、レーガン大統領と同様、一昔前の二枚目俳優を髣髴とさせた。目は

憂愁の灰色だったように記憶している。

見た感じからすると私と同じ年頃ではないかと思えたが、実際の年より若く見えるに違いなかった。眉間の二本の縦皺と額の横皺は深く、鬱屈した表情は多くを語ることを嫌い、人生などどうでも良いといったアナキーを感じさせるところがあつたが、それは師の魅力となっていた。そして全体から受ける印象は「外人っぽい日本人」であり、みごとに日本人化していた。後にクリスマス・カードでなく、手書きの年賀状をいただいたが、文といい筆使いといいわが国の大学生より優れていた。

ステファニー師は、新聞記者と支援者の若者と一緒だった。その二二、三の若者は自動車製造会社の現場作業員だったが、師から強い影響を受け、会社をやめ、師と行動をとにもするようになったという。若者の話によれば、師もかつてはミラノの自動車製造会社フィアットで組立て作業員として働いていたが、期するところあり、宗教の道を進むようになったという。従って、車が好きなことは十分察しがついた。

彼らはステファニー師の運転する車で来たが、若者によればこの街でもっともポンコツだというのが師の自慢だという。昔懐かしい日産であり、エンジンをかけるとバンパーがガタガタと上下に震え、ラッフィング・トウド（笑うガマ蛙）という言葉が自然に口をついて出て、笑ってしまった。そのような車が車検をクリアしたのは考えがたかったが、自分で修理して車検を受け、強引に通してしまったのかもしれない。しかし海外で布教するカンリック神父が新車を買えないほど金に困るはずがなく、Mが語ったことにある程度の事実を認めざるおえなかった。

大阪を拠点とする新聞社の記者が同行してきたのは、社会問題化しだした外国人不法就労者にかかわる見解を私から聞きたいとのことだった。しかしそのとき、師は新聞記者を「だし」に使ったのであり、Mの様子を探りにきたのではないかと思えた。あるいはMのごとき男を匿っている人間に興味を持ったのかもしれなかった。そのためか、師は初対面るとき緊張気味であり、お互いに自己紹介といったこともなく、相手を知っているのは当然といったごとく日本語で会話は進んだ。師は自責の念があつたのだろう、Mに仕事について様々な質問を英語でしたが、Mは伏し目がち反抗的で、口をきくのも大儀といった傲

慢な態度であり、ほとんど答えることがなかった。その状況から、毎夜愚痴を聞かされていた師は、忠告しても従おうとせず、自分の正当性をあくまでも主張するMに激怒し、思いきり叱り付けたことは間違いないようだった。師は土地の人々に悩み事にたいするテレフォン・サービスをしていたし、他の外国人就労者の相談にのったりしていたから、Mのごとき粘着質の人間に一時間以上に渡って毎夜電話をハイジャックされてはたまったものではなかっただろう。おそらくステファニー師がわが国で腹を立てたのは、そのときが最初で最後だったに違いなかった。

いずれにしても、ステファニー師に喜んでもらおうと、三人をMと一緒に昼食に招待することにした。招待したのは和風ステーキ・レストランだったが、その店のコックはとびきり腕のよい料理人である。

やがてステーキを口にすると師は「これはいったいなんという食べ物なのか、こんなおいしいものを一度も口にすることがありません」と流暢な日本語でにこりともせずに語った。師はしばしばジョークを口にしたが、そうしたときも笑いを伴なうことはなく、笑うべきときは一拍子遅れて声をたてずに笑い、なにかにつけてクールだった。確かにその店のステーキは舌の上でとろけるおいしさだったが、財布がとろける支払いでもあった。しかし、散財が惜しいという気はしなかった。後になって、「食事にすら招いてくれなかった」と言われたくなかったのでMも誘ったが、断わることはなく、仕方ないから食べるといった態度だった。

新聞記者は、私が語った永住権を持つ在日韓国人・朝鮮人に関する見解を記事にするが、右翼が黙っていないだろうから名前と職業は伏せておくといい、右翼が来てもいっこうにかまわないと私が言うと、彼らを甘くみるとんだ目にあいますよとのことだった——それほど大袈裟なことではなかったが。

当時私は納期の猛烈に厳しい翻訳の仕事のみならず、苦手な帳簿をつけたり、税金の申告もしなければならず、生きることになってしまっていて、しばしば地震が起きてこのまま死ねたらなんと幸せかと本気で考えていた。当時は企業戦士の過労死が社会問題となっていたが、意識はなかったらうが、死んで安らぎを得たかったのではないかと思えて仕方なかった。

数日後、新聞記者はよほど心配だったようであり、記事は出たが右翼のいや

がらせはなかったかと問い合わせてきた。しかし私は記事を読んでいなかった
ので、どうした内容であったか知ることはできなかった。

* * *

働き出して三ヶ月ほどしたころ、彼が働いている深夜喫茶と同じ経営者のス
ナックで少女を意識をなくすまで酔わせ、担いでどこかへ連れ去ったと従業員
から聞かされた。その女性とは、ステファニー師のカソリック教会を中心とし
て活動していた不法就労外国人支援グループのあるメンバーがMに紹介した
ようだった。その女性をMは事務所に連れてきたが、秋田出身の看護婦といい、
二二、三歳ぐらい、背はほぼ平均、痩せても肥えてもいず、白人のように色白
で、抜群のプロポーションであり、まれに見る官能的な美人だった。

事務所でMは「きちんと挨拶せんか！」と女性を英語で叱りつけた。彼女が
自分の意のままということを見せつけたかったようだ。そしてその夜からMは
事務所に帰ってくることはなくなり、三日ほどして戻ると、女性と同棲するか
ら事務所を出ると言ってきた。上手くいかないと予想したが、喫茶店のコーヒ
ーで彼を祝ってやり、いつ荷物を引上げるか聞こうとした。そのとき何を語っ
たのか思い出せないが、私はくだらないジョークを口にした。そして次の瞬間、
予想もしなかった成り行きにはっと息をのんだ。

厚い凸レンズを通し、ガラスの義眼のごとき冷たい目でMは私を見下ろした
が、それほど軽蔑に満ち、残忍・冷酷な表情の人間を私は見たことがなかった。
実際に見たことがないのみならず、外国の犯罪映画においてすら、そのような
表情の人間を見たことはなかった。

そして彼は煙草を吸っていたが、黙って私を見下ろしながら、私の顔にこれ
みよがしに煙草の煙をふくと吹きかけてきた。彼の口元を見詰めながら私は呆
然である。すると更にひと吸いし、再びもつとゆっくりと煙を顔に吹きかけて
きた。

「あつ、あつ、あつ！」私は心の奥で叫んだ。それまで動いていた画面が恐
怖で氷結した。

子供のころから暴力が大嫌いで、ヤクザ映画や暴力映画を見たこともなく、

即座にかつと腹を立てることのできない私はどう解釈すべきか途方にくれた。わが国では、かりに暴力団員でも一般の人の顔に煙草の煙を吹きかけるといふ侮辱の仕方はしないだろう。暴力団員でもある種の礼儀を心得ている。

そのころになると、私は彼の心を間違ひなく読めるようになっていた。言うまでもなく、彼はもう私の世話になることはないと考え、私にたいする軽蔑と憎しみを一気に発散したのである。私にたいする憎しみとは、女性を紹介しなかったことと彼の不満を十分聞いてやらなかったこともあっただろうが、それだけとは思えなかった。イスラム社会の人たちは誇り高く傷つきやすい。私の世話になっていたことでお世辞を言ったりして卑屈になっていたのだが、卑屈にさせられたと考え、私に怨恨を抱き続けていたのだ。イランやイラクでアメリカが嫌われたのは、もとはと言えば、星条旗を墨で消せないように全面プリントした紙袋を使い食糧援助などをした無神経さからだった。要求しながらも誇り高い国民は、貰わねばならないとなると、施す者を憎むようになる。

私の恐怖というのは、彼の残忍な表情ゆえだけとは思えなかった。

当時Mは皆からひどく嫌われていた。ある従業員から、Mが皆から殴られたり追い出されないのは、私が店のオーナーの友達であるため、皆は遠慮しているのだと知らされた。つまり、彼は私に守られていた。

また、私が第三者を装い、Mの潜伏場所、あるいは働いている場所を入国管理事務所に電話すれば、係官はまっていますと拘束にくる。そうなれば彼は女性との同棲どころか、貯金などほとんどない状況で強制送還されてしまう。自分がどのような状況にあるかということは、死活にかかわることだから、わが国民だったら知能の劣る子供でも忘れることはないだろう。そのような知能の人間がいるということも恐怖だったのではなかっただろうか？

いずれにしてもその時点ではあまりにも意外な出来事であり、どう考え、どう対応すればよいのか見当がつかず、黙って席を立つと、彼の分もコーヒードを払い、店をでた。そのときレジでMと目があつたが、彼は勝ち誇り、軽蔑の薄笑いを浮かべていた。

事務所にもどつたが、ありえない出来事であり、腹が立つまでに半時間を要し、やがて怒りで手が震えてタイプが打てず、その日は仕事にかかることができなかった。それでもMを売ることはできそうになかった。そのときは認めた

くなかったが、「今となって恐れをなし、役人に泣きつき助けを求めることができようか！」と虚勢を張っていたこともあった。

ジョージ・オーウェルの『ビルマの日々』という小説を思い出した。

ビルマに貿易会社の派遣社員として赴任したイギリス人主人公がイギリスの植民地政策に批判的になるのにたいし、イギリス人のみならずインド人からも、イギリスは文化をもたらしたのであり、現地民は蒙昧・怠惰であり、親切にすれば付け上がり仇で返すから、彼らに同情したり、理解を示したりしてはならないと諭される。しかしあくまでも理想を貫こうとし、それだけが原因でなかったが破滅していく物語である。主題は現地民の後進性にあるのではなく、理想を追う者の脆さだった。

どういう経過があったか知らないが、Mが望んだように看護婦のパートと一緒に住むことに成功しなかった。彼女が自分の金を盗んだから捨てたと従業員には語ったという。

Mはパニックになった。やっと自分のしたことに気付いたようだった。私は黙って見つめるだけだったが、目があうと彼の瞳はちらちらと気弱に揺れ、視線を落した。今度は私を過度に恐れ、小心さを露わにした。「知恵と勇気がないから善人なのだ」と悪人の筋を通す文学性・思想性があったら、私は負けを認め、彼を見直したであろう。ところが身が危うくなると、ひらりと弱々しい生きものに擬態し、慈悲を求めて来たのである。

そして私の娘に自転車を買ってやりたいと申し出てきて私を激怒させた。「自転車など買う必要はない。もし買ったら事務所から蹴り出すからそのつもりでおれ！」私はどなりつけた。そのとき初めて私は彼を叱りつけた。

私は仕事を終ると強い酒を一気にがぶ飲みして寝るのが癖になってしまっていて、酒癖の悪いアルコール依存症の傾向を示しだし、仕事にも影響がでたため、しばらく以前からジョギングを始め、テニスを習い始めていた。そして少し上達すると、二〇代の会社員など独身者を集めてテニス・チームを編成し、土曜日か日曜日は半日仕事を休み、テニスにどっぷりとなった。メンバーはたちまち増え、たまにしか顔を出さない者も含めれば男女半々で五〇人を超えていた。そのメンバーの一人に、Mと一緒にキッチンで働いている大学生がいて、その学生からMが私を神のように崇めているという話をしばしば聞か

され、聞かされるたびに真つ黒な憎悪が胸のうちに渦巻いた。とはいえ私の生活の中心はやはり仕事にあり、Mについては何も考えないことにしようと思いを決めた。

Mはそれ以降、同僚にも気を使い、率先して働くようになったようだった。店では学生のアルバイトが予告なく休み、そうしたときMが穴埋めし、店にとっては頼りになる従業員となったようだった。

一〇ヶ月ほど経ち、日本語が完全に話せ、日本人のやり方にも馴染んだようであり、店の経営者はMの働きが良いと昇給させ、これはボーナスだと袋に入れた金を渡したところ、Mはわっと泣きだしたという。経営者はひどく感動し、私にも感動することを要求するような口ぶりでの出来事を語った。Mの涙は「鰐の涙」ではなかっただろうが、私は再び何も考えずにいようとしたり。それからしばらくして、Mは私に話しかけてきて、日本女性と結婚する夢は捨てた、これから今の仕事一筋でいきたいと語り、私に誉めてもらいたかったようだった。「それはよかった」私は無感動に言うのと、彼に背をむけ、仕事机に向った。

女性にたいする夢は捨てたというのは良かったが、それは「これからはシャワーを浴びない、身体は洗わない」という宣言でもあった。猛烈な体臭を発散するようになった。たまりかねてシャワーぐらいは浴びるようにと忠告したが、逆効果だった。臭気をより強めて行き、窓を閉めていると、吐き気をもよおしそうだった。外国人がアパートを借りようとしても断られることが多い。これもまた人種差別だという人がいるが、体臭の強い者がそのように多く、その臭いは日本人に耐えられないし、たちまち部屋に染み込み、一度染み込んでしまうとかなる消臭処理をしても永久に抜けることなく、部屋の借り手がなくなるのである。要するに畳、ふすま、障子など湿気を吸収する材料を使った和室はそうした外国人に向かないのである。

外の埃りをかぶるどころか、煙草の煙を顔に吹きかけられ、強烈な悪臭を散され、散々だった。役人に盾付いた「ツケ」がまわされてきたのだ。

Mは私の事務に一年半ほどいた。やがて喫茶店の経営者は従業員が増えたため、マンションの一室を借り、そこに従業員たちを宿泊させることにし、Mもそちらに移った。そして半年ほどすると、外国人不法就労者に対する法律が変り、雇用すると雇用者は罰金を課せられることになった。そこでMに入国管理

事務所に出頭するように勧告した。出頭する日、彼は人の背ほどの大きさの布で包んだ荷を携えていた。おそらくその荷を現地で換金するだけで、二、三年は生活できただろう。

いずれにせよ、犯罪に走ることなく生きていけるだけの金を稼がせてやり、送り出すことができたのである。

彼は事務所に挨拶に来て、「皆は自分がアフガンゲリラだというのを信じていたが、騙されていたのだ」と得意の面持ちで笑った。

* * *

実務翻訳で食べていこうとすると、和文英訳では、英米人に通じるか否か以前に日本人客に受ける英文に訳さねばならないことがあるし、そういう英文に書換えて欲しいとタイプの打ち直しを要求されることがしばしばあった。かつてあるアメリカ人が日本人と組んで翻訳業を始めたが、納入した英語が出鱈目だと日本人客に次から次に指摘されたり、日本人の校正を受け、腹を立てて帰国してしまった。

翻訳を依頼する企業や官公庁などで「英語ができる」と自認する人が急増しだすと、意味不明の和文原稿を、数式、図面、配線図や仕様書を頼りに意味を憶測して和文を補正したり、パンフレットなどでは英語にできる和文に書きかえて毎週二度事務所に来ていた北米人コンサルタントの協力で英語らしい英語にすると、意味不明の英文とか和文原稿と一致していない英文と評判を落として客が遠のき始め、かといって、日本人受けする英文をつくるのはうんざりであり、かつては天職と思えた産業技術翻訳に嫌気がさしてきた。

そこで翻訳の仕方などにかかわる原稿を起こそうと発起した。和訳の誤訳の例として新約聖書の和訳から引用することにし、英語版（もとはギリシャ語）を読んでみると、我々が知っていたイエスとは驚くほどかけ離れている。イエスはひどく反抗的・攻撃的な人間であり、政権貴族階級であるサドカイ人（びと）、さらには急進反体制派のパリサイ人をも神をかたる詐欺師どもと痛烈に非難し、弟子たちを連れて殴り込みをかけているし、兄弟や母親マリアをひどく嫌っていた（古い聖書では、イエスに都合の悪い部分は削除してあることが多

い)。また、ステファニー（ステパノ）という名は新約聖書にも出てくる。イエスの死後、イエス教団に弟子として入団するが、イエスの言葉を正しく人々に伝えようとして使徒たちの反感を買い、教団の内部闘争に巻き込まれ、ペトロにより売られ、サウル（のちのパウロ）の主宰する石打の場にひき連れられた殉教者である。

そのように新約聖書に興味を持つようになり、ステファニー師に電話し、新約聖書の和訳をどう思うかということ、イエスの反逆思想についてどう思うかといったことなどについて電話でたずねた。すると師からはまったく予想外の答えが返ってきた。

「キリスト教について私はなにも知りません。聖書は難しく、私には良く理解できず、イエスがどうだと問われてもなんとも答えようがありません。それに正しい生き方がどうのこうのと、宗教の話などしたくないのです（ほとんどママ）」と一万円の靴を千円にまけてくれといわれた靴屋の店員のように軽蔑の口調だった。刺身の嫌いな猫や地動説を信じない天文学者がいると知らされても、それほど私は驚かなかつただろう。師は神や善や愛の投売りをしに日本に来たのではなかった。だがバチカンに密告されたら、減給三ヶ月ではすまず、パプアニューギニアの山岳部落に左遷されたであろう。

——師ほど日本人を理解している人間はいない！

私は思った。

* * *

Mがわが国を離れ三年ほどして、パキスタンから手紙が届いた。手紙の宛先は「Mの日本人妻」とあった。手紙は粗末な紙に手書きされ、粗末な封筒に入っていた。ひどい英文だったが、そうした英文を読むことに私は慣れていなかった、ほぼ完全に理解できた。

Mはパキスタンで知りあった友たちに日本へ稼ぎに行けば一年で金持ちになれると説得し、陸路日本を目ざしたが、中国に入ったところで手続き上必要と三人の持ち金とパスポートを取り上げ、中国の警察にパスポートを持たず不法入国した三人の回教徒がいると通報し、三人は逮捕されてしまったという。

手紙は、そちらにMは行っていないかという三人のうちの一人の兄からの問いあわせだった。Mは私の名刺を見せて三人を信用させたのだ。

中国人は回教徒をホイホイ(回回)と称してひどく軽蔑し、嫌っているし、警戒してもいる。そうした「罪人」を扱うのは、言うまでもなくわが国でいう入国管理事務所だが、その地域で逮捕されたとなれば、かりに中国語で事情を説明しても聞いてもらえないだろうし、スパイかゲリラとみなされ、拷問にかげられるおそれがある。いつ釈放させるかわからないだろうし、だれが釈放の決定権を持っているのかすらわからないだろう。

パキスタンには、残念ながら私としてはなんの助けもできないと、やりきれない思いで返信をしたためた。そしてそれから一年半ほどして、同じ手紙主からほぼ同じ内容の手紙を再び受けとった。中国に問い合わせても情報は得られなかったようであり、三人は未決囚として収監されているようだった。一生、拘束されたままではないかという嫌な予感がした。

それから一年ほどして、東京から若い女性が電話してきた。Mのことだと語ったとき、起きるべきことが起きたと思った。欧米の女性なら決して相手にしない男だが、日本女性は外国人犯罪者にまったく弱いのである。女性とは夕方六時頃地下鉄駅で待ちあわせ、ファミリールェストランで話しあうことになった。

彼女は寂しい顔立ちで華やかさがなかったが、整った顔であり、白いスラックスに食品売りの売り子が着る上つ張りのような白い上着を身につけ、化粧も控え目だった。身につけているものや持ち物などにちぐはぐな印象があり、自分をどう表現してよいかわからないようだった。仕事は公務員をしていると語ったとき、学校の先生でしょうとたずねるとそうだと答えた。自らに対し無関心を装い、他人事のように感情をまじえず語ろうと努めているのが哀れであり、視線はしばしば空ろに漂い、笑いはまったくなかった。

韓国に旅行し、日本に入国する機会をうかがっていたMと知り合い結婚を約束し、彼女は日本に帰ってきたが、Mは韓国にいてという。事業を起こすので金を貸してほしいと言われて貸したが返さず、更に金を送れと毎晩電話を送ってくる。電話を切ると間髪を入れずに再び電話してきて、深夜ですら至急金を送れと脅しをかけてくる。もう金はないといっても信用せず、怖くなってきた。

父親は狂ったように腹を立て、母親は寝込んで食を口にしなくなってしまったという。おそらく父親も教師であり、異性との付き合いに異様に厳しく躰たのだろう。そして他のアジアの人々に偏見や疑いを持たず、親しくしなければならぬと教わり、自分もそう教えてきたのだろう。兄弟や友達など相談する相手もないようだった。

Mは私の名刺を見せ、この翻訳事務所で働いていたと語り、彼女は電話番号を控えておいたという。

「パキスタンはカラチ大学の日本文学部を卒業したと言っていました……」と彼女が語ったとき、私の事務所に居候し、深夜喫茶で働いていたのだと説明すると、「そう言えば、あの人の日本語は名古屋弁だったわ!」とそのときだけ明るいう声になり叫んだ。しかし名古屋弁で『源氏物語』を講義するという話に私は笑う気になれなかった。

「あの人は子供が好きです。子供の好きな人に悪人はいないのではないでしょうか」と女性は語り、私を驚かせた。彼がどのような人間か語るとは避けたが、「回教国で生れた彼は一〇代で結婚しているはずであり、回教では四人の妻を持つるのを知っていますか?」と現実を知ってもらおうとした。

「もっと早く知るべきだった、いまからでは手遅れだわ……」と自分に語りかけるようにひっそりと。私が黙っていると、同じ言葉を繰り返した。それが何を意味するか考えるまでなかった。それまでひた隠しにしていたことを、すべてぶちまけて膿を出し切ってしまった、すがりつきたい思いのようだった。全ての責任が自分にあるような気にさせられ、私は椅子に深く沈みこんだ。とはいえ所詮他人事であり、他人の痛みは実感できないのである。子供のころチビと言われ、二〇歳まで持たないと言われた虚弱児であり、ために学校では盛んに苛めにあつて登校拒否が続いていた私は、かりに子供が生まれたとしたら、黒い肌の子が学校でどんな目に遭うかと考えざるをえなかった。しかしながら、いうまでもなく私は彼女を批判する立場になかった。

なにか食べないですかとたずねたが、何も食べたくないと思いの深さを知らされ、私も食欲をなくし、当時煙草を吸っていた私は煙草を吸い続けた。何をそれほど長い時間語ったのか皆目覚えていないが、気付くと一二時近くである。しかし帰ろうとする気配はなく、朝までそこに座っていたいようだった。泣き

出したいのを必至にこらえているようでもあった。気の毒とは思ったが帰るようにと促し、彼女を地下鉄乗り場まで車で送った。そのときほど人通りの絶えた街の夜が悪意に満ちていると思えたことはなかった。

地下鉄駅への下り口で彼女を降ろしたが、ぼくとその場に突っ立ったままであり、私が車を発進させても階段を降りていこうとせず、薄闇に滲んで浮ぶ白い影は私を咎めていた。しかし、彼女はかつての香港でのように菓を打たれて売られなくてよかったのである。

当時私は家に帰らず事務所で寝泊りしていた。そして事務所に帰る途中で、ふと彼女は自殺するのではないかという思いに打たれ、全身がぞくぞくと震えた。思い起こせば、ほとんど生気がなく、焦点のあわない空ろな視線で、すでに命を失っていたようですらあった。彼女を事務所に泊めさせてやり、これからどう対処すべきか相談にのってやるべきだった。思い起こせば、何があっても生きるのだといった励ましの言葉すらかけてやらなかった。車を返せば間に合うかもしれないなかった——いや、間に合っただろう。しかし六時間も笑いもユーモアもなく話しあい、私は死ぬほど疲れてしまっていた……。どうせしられようと、酒を一気に飲み、布団を引っかぶって寝てしまいたかった。

女性教師の件から数年し、不思議なことに事務所を閉めようとしていたまさにそのとき、Mが香港から電話してきた。

レーガン大統領のときにソ連へのコム禁制品の輸出が難しくなると、それまで溢れるようにきていた和文露訳の仕事がなくなり、欧州連合EUの結びつきが強くなり、英語がヨーロッパの共通語となりだした一九八〇年頃から独・仏・西語などの仕事がこなくなり、記録的な円高ドル安とバブル経済の崩壊によりとどめを刺された。東京へ行けば英語以外の翻訳や通訳で食べていけるかもしれないなかったが、翻訳という仕事にいやげがさしていた。

二度と外国語にかかわりを持つまいと事務所の蔵書——少なくとも二千冊ほどの辞書や原書——を全て処分し終ったときの電話だった。

彼は私の街の電子部品製造会社と現在取引をしているが、儲けは折半にするから話を纏めてもらいたいとのことだった。無論、彼が中国で売った三人のパキスタン人の件について、パスポートを今でも持っているかといったことをた

ずねた。Mはこちらの質問に答える気などまるでなく、「やつらは馬鹿だ！」のひとことだった。東京ガールについても結婚しなかったのかとたずねた。その問いは彼を一瞬たじろがせたようであり、「なにか彼女に語ったのか？」としわがれた声で聞き返してきた。

「ああ、どんな人間かと問うので、優れた人間だ、早く結婚したほうが良いと伝えておいたが、結婚しなかったのか？」と問うと、Mは黙ってしまった。

取引の件はいい加減な話にちがいがなかったが、どんなことになるか興味があり電話してみた。すると長い時間待たされ、切ろうとしたとき、経営者と思える人が電話口に出て、「あの男からは大損をこうむった。二度と電話してきてほしくない」と怒りを押し殺した硬い口調で語り、がちゃんと電話を切った。突然後頭部をガツーンである。恥かしさと自責の念に身を焼かれながら、怖れるようにそっと受話器を戻した。

すでに一〇年以上経過していることや、彼の勝ち誇った口調からして、単に「恩を仇で返す」ことだけが目的とは思えなかった。そして後にテロリストたちがニューヨークのツインビルを崩壊させた衝撃の写真を新聞で目にしたとき、私はMを思いだし、「これだ！」と思わず叫んだ。動機は宗教だけではなかった。彼らイスラム・テロリストやMは非イスラム社会での暖衣飽食の体験者だった。自分たちは虐げられ——彼らはそうみなす——、貧困と危機にあるにもかかわらず、ことなる宗教にあり、豊かで平和な生活を当然のことと享受している社会の人々に恐怖と被害と悲劇をもたらすのは英雄的行為だった。Mはその英雄行為を私に誇りたかったに違いなかった。

全ての彼の犯罪で私の名刺が活躍した。私が知ったMの犯罪はその三件だったが、恐らくその何倍かの被害者がいたことだろう。そして、被害者のなかには、私の名刺の名前を覚えていて、M以上に私を憎み、罪を償わせたいと思っただのは一人や二人ではなかっただろう。日本で二年間悪いことをせず金をためたから、一〇年以上働かなくとも食べていけ、犯罪から足を洗うことができただろうと考えたのはあまりに甘かった。

——そのようにして彼は罪人（つみびと）となった。（ルカによる福音書）
無論、私自身のことである。

しかし言いわけがましいが、もしMが日本に住み付いていたら、上記したこ

とき罪を犯すことはなかっただろう。思うに、わが国は世界一犯罪のしづらい国なのではなからうか。

Mがいなくなつて西アジア人を嫌つたかといえは、そうではなかった。あるときガソリンスタンドでMほど黒い肌でなかったが、やはり三〇歳ぐらいの同じような外観の男が働いているのを見て、事務所に遊びにくるように誘つた。Mと比べると彼には謙虚さが見られ、知性的で好感がもてた。やがて彼は現われたが、スリランカ人で仏教徒とのことであり、やはり故国には妻子がいて、日本女性と生活しているようだった。英語は苦手なようだったが、日本語が達者だった。タミール人イスラム・ゲリラの話など、興味ある話を色々披露し、私を楽しませた。

わが街のある私立大学に仏教を教えにきているスリランカの高僧は、考えうるもつとも過酷で危険な荒修業を達成していて、国では誰もが名を知り、生き神と崇める人間だが、日本に来てからは髪をのばし、車を持ち、肉食をしてビールを飲み、日本女性と同棲するようになってしまったという。「人間は環境の生き物です、環境に左右され、たちまち適応するのです」とダーウィンに先立つ進化論者ラマルクのごときことを語つた。

ステファニー師に話をもどすと、暇ができたら会いに行き、居酒屋で話しあいたいと考えていた。ところが東チモールが独立すると、師はそちらで宣教することになり、日本を後にしてしまつた。師がいなくなると、自分が会いたいと願つた人間は師以外にいなくなつたことを思い知らされた。

東チモールに移つてからも、しばしばステファニー師の近況が新聞に載せられていた。私は良く知らなかったが、小牧市で師はカリスマ人気を博していたのである。

一方、借金を残して事務所を閉めると、職をさがした。今日、中高年者には、若者が嫌うキツイ・キケン・キタナイの仕事しか残されていない。ダンプ運転手、上下水道土木作業、鉄筋業者などをした。いずれの仕事も翻訳より楽であり、自分の方から辞めた仕事はひとつもなかったが長続きしなかった。五〇代で始めたことであり、しばしば危険な目にあつたり怪我をしたりで大きな事故を起すことを恐れた雇用者から首にされてしまつた。独身を通していた姉は、「その年で失敗したら再起不能だ」と嬉しそうに語つたが、その通りだろ

うと思えた。第一、本心を言えば、再起しようという気がなかった。もともと金銭感覚がないから激貧となり、家内から生活費を要求されると、前後のことを考えもせずサラ金から目いっぱい金を借りた。自分にはどうにもできないことだったが、何かにつけてオール・オア・ナッシングであり、一度つまずくとナッシングの方を求めてしまう弱さがあった。

多くの人たちにとり返しのつかない不幸をもたらした報いであり、酒癖の悪いアルコール中毒になって破綻していく自分に、オーウェルの小説の主人公のような慰めがあった。五七か八になったときだった、収入はゼロで家庭崩壊であり、ホームレスを始めようとしたが、踏ん切りがつかずいたところ、母が認知症になり、実家に戻って母の面倒をみなければならなくなり、私は一人でそれまでの新興住宅地から一〇キロほど離れた実家に戻った。母の年金を使い、家内にもいくばくかの生活費を送ることができ、なんとか働かなくとも糊口をしのぐことができた。すると外国語への情熱が再燃し、数カ国語で世界の名著を読みまくるといふかって夢見たことを実行しようという気になり、再び外国語の世界に入っていく、母を車椅子で散歩させる以外はテレビも見ず、読書あるだけの生活となった。

ある日の朝、近所の喫茶店で新聞を広げていて、ステファニー師の写真が載せてあるのが目に入った。そして目は釘付けとなった。

東チモールで交通事故で即死したという！

師は現地の部落で養鶏を指導していて、教会に帰る途中で車がスリップし、谷に転落して死亡したとあった。車は支援者グループが浄財を集めて買った最新の高級四輪駆動車だったという。やりきれない運命のパラドクス。師が乗っていた「笑うガマ蛙」を思い出さずにいられなかった。師にとって高級四輪駆動車は分不相応だったと言いたいのではない。しかしボロ車だったら慎重に運転し、事故は起きなかったのではないかと考えずにいられなかった。私がMを匿ってやったことが人々に不幸をもたらしたように、ステファニー師支援の人々の善意も師に死をもたらす結果になってしまった。

ときに不良少年のようだったステファニー師は、ジェームス・デーリンや赤木圭一郎と同じように人生の最後まで青春であり、師らしい異国での孤独な死だった。師は、洗礼を施すためでなければ、信者を増やすためでもなく、神の

言葉で諭すために現住民の部落を訪れたのでもなかった。どうしたら鶏がひとつでも多くの卵を産むようになるか教えに行ったのだろう。神のためでなく、鶏のために死んだとしても殉教死であり、ステファニー師にとっては望ましい最後ではなかっただろうか。

その後、新聞には一般読者の投稿したステファニー師の死を悔やむ記事をしばしば目にし、いかに師が人々から慕われていたか再び驚かされた。ただ、どのようなことをしたかといった具体的な記述はほとんど目にできず、師と面識のなかった人は、なぜそれほど慕われていたのか理解できなかったのではなからうか？

私はステファニー師から直接聞いた話、あるいは新聞に載せられていた記事以外に師について知らないし、生年月日さえ知らぬままである。調べれば意外な事実を知ることができるかもしれないし、調べるのは難しいことではない。しかし私よりステファニー師の身近にあり、師を熟知している私より適した人が必ずや師について記録を残してくれるであろうと期待するのである。

* * *

二〇〇四年に、社会的弱者を支援活動する個人や団体を表彰するステファニー・レナト賞というのが設けられた。そして最近(二〇〇九年一月二十四日)、バングラデシュの首都ダッカでアイチ・ホスピタルの院長をし、スラム街で院外無料診療活動もしているモアゼム・ホセイイン医師(四七)が選ばれたと写真入りで当地の新聞に載せてあった。医師は名古屋大学の医学部(小児外科)で学んだといい、外国人で表彰を受けたのは初めてという。一九九六年にベッド数二〇の無料診療病院を設立するには、日本バングラデシュ友好協会(名古屋市昭和区)の有志の人々の支援があったという。そして現在ベッド数七〇の総合病院となっていて、バングラデシュ政府の補助金で医科大学も併設され、今年始めて二八人が医者になり、彼らも院長に習い、貧しい子供たちのために尽くしたいと語っているという。

その記事は私にとって大きな衝撃だった。繰り返し、繰り返しその記事を読み返した。すると老いて涙もろくなったようだ、胸がつまり、字は滲み、読み

続けることができなくなってしまった。医師は、日本人のために何かをしたというのではなかった。しかし、彼の国の人々のために貢献してくれたら、日本人への何よりも恩返しなのである。自分はなんとという素晴らしい国に生まれたのかと胸が詰まったのである。

実は、Mは他の国のパスポートを持っていたが、バングラデシュはダッカ（彼は「タカ」と発音した）の人間だった。日本で日本人に学び、日本人からの善意の支援に答え、滅私奉公の精神で自国の貧しい人々を救おうと活躍している人間はお伽噺ではなく、やはり現実にはいたのである。

ステファニー師が聞けば、なんとセンチな下らん話をと私を軽蔑しただろうが、最後に聖書から私の訳でひとこと引用しておきたい。

一粒の麦もし地に落ちて死ねばそれまでである。

しかし生き長らえれば、多くの実を結ぶであろう。（ヨハネによる福音書）

——完——

2009年6月20日／2010年11月10日